

思春期症例における院内学習指導の取り組み

○河端崇、佐藤渉、吉川憲人、太田健介、太田秀造、太田耕平

医療法人耕仁会 札幌太田病院

【はじめに】

当院では思春期症例への入院治療を積極的に行っている。不登校、ひきこもり、自傷行為、家庭内暴力など、患者には教育の機会に恵まれていない者が多く、学業不振が登校や社会復帰の障害の1つとなっている。そこで、当院では平日2日と土日祝日に院内学習指導を開き、当院職員、医学生が病棟内に設けた学習コーナーで指導にあたっている。現在は思春期のみならず成人患者にも門戸を開放し、資格取得や基礎学力習得を目標に参加している。2011年の1年間で216回の院内学習指導を開き、1回あたり 4.4 ± 2.3 人が参加した。今回は2011年に当院に入院した思春期症例の概略と院内学習指導の参加状況について報告する。

【対象と概略】

2011年に当院に入院した10歳から19歳までの37症例(男性19例、女性18例)を対象とした。平均入院日数は36日、主病名(ICD-10コード)は小児<児童>期及び青年期に通常発症する行動及び情緒の障害(F9)が15例で最も多かった。家庭状況では片親が13例であった。学習進度は1年以上の遅れが確認できたのが15例で、他の症例でも学業成績が中～下位であることが多かった。

【参加状況と実施後の変化】

学習指導に参加した症例は35例で、参加率は約8割だった。参加後の変化として学習習慣の獲得が12例と最も多く、初回指導時に参加を渋ったり戸惑いを示す症例が多かったが、回を重ねると殆どの患者が自ら参加し学習を始めるようになった。また、9例では入院中も学力を維持することができ、円滑な復学、進学につながることができた。

【考察】

精神科病院での同様の取り組みに対する報告は狭隘した範囲では確認できず報告する意義があると考えた。数値化することが難しいため効果を評価しづらい面があることは否めない。しかし、学業不振を改善するきっかけを積極的に作っていくことが多様化、複雑化する思春期症例において問題解決の一助となると考える。